

近世伊勢物語写本へのアプローチ

―葛岡宣慶本をめぐる―

藤島 綾

*キーワード

葛岡宣慶・近世写本・絵入り本・樹形本・行幅

一 はじめに

『伊勢物語』には近世に作られた写本も多い。中世の有力伝本に恵まれる本文研究ではとりあげられる機会が限られるが、伊勢物語受容史について考えようとするのであればこれら近世写本の検討もやはり必要だろう。

鉄心斎文庫は多くの近世写本を含んでいる。ただし、書写に関する経緯や伝来が不明なものも多く、研究の進展が俟たれる。そこで、本稿ではまず葛岡宣慶の奥書を持つ諸本をとりあげて考察を試みるものである。葛岡宣慶（一六二九―一七一七）は公家として生まれ、のちに移り住んだ大坂で和歌の指導者として活動した人物である。彼の奥書を持つ本について書写の背景と挿絵の特徴を探り、宣慶本の時代性に迫りたい。

二 葛岡宣慶について

宣慶は寛永六年（一六二九）二月二日、庭田重秀の二男として生まれた。庭田家の本姓は源、家格は羽林家である。寛永一四年（一六三七）九歳で従五位下に叙され、同一九年に元服し従五位上修理権大夫となつた（庭田家系譜）。二五歳の頃は院参衆として後水尾院に仕えていたことがわかつている（隔葉記）。その後、承応三年（一六五四）二六歳で従四位上に叙されたが（庭田家系譜）、以降の官位は詳らかでない。のちに大坂へ移り住み、新歌林苑と名付けたサロンを形成して門人達を指導していたが、七〇歳の時に帰洛。後年、名を宣之と改めた。享保二年（一七一七）九月二九日卒。八九歳。洛西元廬山寺町徳壽院に葬られた（庭田家系譜）。

姉は後光明天皇典侍で女一宮孝子内親王生母となつた庭田秀子、二歳

違いの兄が庭田雅純である。宣慶は葛岡、弟資冬が田向、重村が見雲の新家を興しており、公家の嫡男以外は不安定な生活を送る者も多かった時代に、恵まれたスタートをきった人物といえよう。

後水尾院の院参衆として仕えていた承応三年に従四位に叙されたが、その後については詳しくわかっていない。ただ、明暦二年（一六五六）に鳳林承章が宣慶に歌仙色紙を依頼している（『隔蓑記・四月九日条』）。この頃はまだ京で暮らしていたであろうか。官位については、寛文六年（一六六六）に宣慶が河瀬菅雄に『阿古根浦之巻』『玉伝深秘』を相伝した際の奥書に「正四位上葛岡氏源宣慶朝臣」「葛岡右京大夫源宣慶」とあったことを『伝受五卷書』（宮内庁書陵部蔵）が伝えている。さらに、宣慶筆『三十六歌仙』（射和文庫蔵）にも「正四位上葛岡修理権大夫源宣慶朝臣」の書写奥書が認められ、正四位に進んでいた可能性も残っている。

また、歌学に関しては、菅雄への二書の相伝のほかに、『古今序秘極』（蓬左文庫蔵）の題簽に「葛岡宣慶伝之」の書き入れが認められるなど、秘伝への関与を窺わせる。

延宝七年（一六七九）刊『難波鶴』は、歌学者の項に「上町 葛岡殿」と記し、当時五一歳になっていた宣慶が大坂で歌学者として暮らしていたこと、民間にあつて公家の格で遇されていたことを伝える。同書は宗因や西鶴の名前も載せ、当時の大坂の文芸の活況を伝える。宣慶には発句短冊も残るが、彼らとの接触はなかったものだろうか。和歌については、新歌林苑で定期的に歌会が催され、浅井忠能編『難波捨草』『堀江

草』や羽山蘭子編『細江草』にも宣慶歌が含まれている。また、松井如匡は元禄九年（一六九六）五月に大坂で初めて宣慶に対面した際の様子を『新歌林園集』序に記し、事蹟を伝える。

元禄十一年（一六九八）、三男広仲が一二歳で東山天皇の命により五辻家を相続することになると（五辻家譜）、宣慶も一緒に帰洛したと考えられる（『新歌林園集跋』）。この時七〇歳であった。その一年後には四男榮頭が一四歳で、東山天皇の命で大原家を興している（大原家系譜）。なお、宣慶の孫勘解由（嫡子宣易の男）は、享保二年（一七一七）、大坂天満宮神主滋岡家の養子に迎えられ滋岡長廣となったが、のちに大原家の嗣子となり栄敦と改めた。姉妹のひとり冷泉為村に嫁したという（庭田家系譜）。

三 『伊勢物語』の書写

（一）宣慶の古典書写

さて、宣慶が書写した古典作品は複数現存しており、一部は画像が公開されている。また、近年はそれらに関するあらたな論考も次々に発表されている。これら宣慶書写資料は和歌関係を中心としており、冊子の場合は一あるいは二帖、卷子の場合は一から三巻という具合に分量が少ない傾向にある。興味深いのは同じ作品を繰り返し写している点で、奥書に「御所望」や「懇望」によって写したと述べることから、宣慶が人

の注文に応じてたびたび書写を行っていた様子がわかる。未見資料を含め、現在判明しているかぎりでは、『伊勢物語』（一〇点）と『三十六人歌合』（九点）の書写回数が多さが際立っている。これらの作品の需要が大きかったということもあろうが、それとともに分量の少ないこれらの書写は容易であり、宣慶も得意としていたのではないかと推測する。

（二）諸本と特徴

これまでに判明した宣慶本『伊勢物語』の所蔵者、整理番号、装訂、数量、書写奥書を掲げる。

A 国文学研究資料館鉄心斎文庫 九八／三五七 列帖装1帖。

「右一冊者平野氏勝安依御所望書写之畢。寛文四年甲辰六月十日
源宣慶」。

B 鶴見大学図書館 九一三・三二／I 列帖装1帖。

「源宣慶朝臣」。四九／一二五段存。

C 国文学研究資料館鉄心斎文庫 九八／三一六 列帖装1帖。

「七月日 源宣慶」。四九／一二五段存。

D 国文学研究資料館鉄心斎文庫 九八／一〇二 列帖装1帖。絵入り本

「右此伊勢物語全部者或人之依懇望書写畢。三月上旬 源宣慶（花押）」。

E 国文学研究資料館鉄心斎文庫 九八／一〇三 列帖装1帖。

「右伊勢物語全部者或人之依懇望書写之畢。三月中旬 源宣慶（花

押）」。

F 国文学研究資料館鉄心斎文庫 九八／一〇四 列帖装1帖。絵入り本

「右伊勢物語全部者或人之依懇望書写畢。五月日 源宣慶（花押）」。

G 国文学研究資料館鉄心斎文庫 九八／一〇五 列帖装1帖。

「右伊勢物語全部者或人之依懇望書写畢。水無月日 從 宇多天皇
廿八代孫葛岡修理權大夫 源宣慶（花押）」。

H 国文学研究資料館鉄心斎文庫 九八／二〇三 列帖装1帖。

「右一冊者或人之依懇望書写之畢。卯月日 源宣慶」。水損あり。

I 国文学研究資料館 サ四／八五 列帖装1帖。

「右一冊者或人之依懇望書写之畢。八月日 源宣慶」。

J 鉄心斎文庫旧蔵（現在所在不明） 列帖装1帖。絵入り本

「右此伊勢物語者或人之依懇望書写畢。正月日 源宣慶（花押）」。
『鉄心斎文庫所蔵伊勢物語図録三』八四／八五頁に書影掲載。

書写奥書はいずれも「源宣慶」の署名を持っている【図1】。宣慶と名乗った期間は、元服して修理權大夫となった寛永一九年（一六四二）から、「宣之」の署名を確認する宝永五年（一七〇八）以前の約六〇年あまりと考えられ、書写もこの間に行われたことになる。書写の経緯は依頼主の名と書写年月日を記したAをのぞいて詳らかでない。

注目されるのは、榊形の絵入り本が三点存する点で（DFJ）、佐々木孝浩氏のご教示によると榊形の絵入り本は作例が少ないとのことである。この絵入り本三点の存在を宣慶本の特徴として指摘して良いだろう。

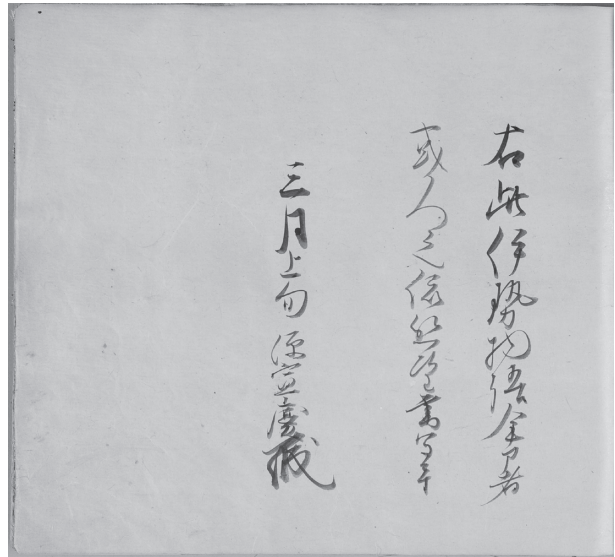


図1 書写奥書（宣慶本D） 国文学研究資料館蔵

(三) 行幅と本文

さて、奥書から宣慶本の成立に関する情報を得ることは難しかった。

そこで注目したのが本文の行数とその幅である。宣慶本はいずれも一面

一〇行書きである。このことから、本文の一行目右端から一〇行目左端

までの長さを測り【図2】、比較してみたところ、数値に

一三・四センチ A

一四・四センチ前後のもの（五点） C D E F G

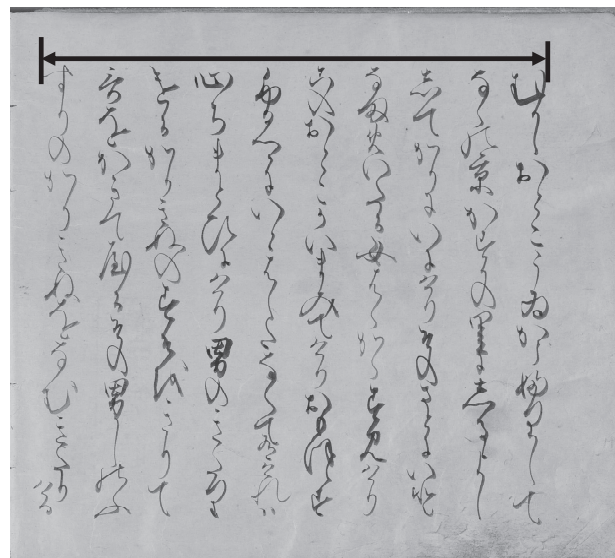


図2 行幅（宣慶本D） 国文学研究資料館蔵

一一・五センチ前後のもの（二点） H I

一五・〇センチ B

との偏りがみられた（以下これを行幅と仮称する）。

書写の際に文字を等間隔で書くための方法はいくつかあったとされる。たとえば、宣慶本と制作年代が重なる奈良絵本の場合は、目安となる小さな穴をあける針目安、へらで線を引いた押界、さらに下敷らしきものの存在を工藤早弓氏が指摘している⁹⁾。ただし、宣慶本には針目安や押界

は認められず、別に何らかの道具を使用したものと思われる。櫛笥節男氏『宮内庁書陵部書庫涉獵―書写と装訂―』（おうふう、二〇〇六年）は、厚手の料紙や物語・歌書等を書写する際に糸罫を用いる様子を具体的に示すが、宣慶本も糸罫を使ったものだろうか。あるいは、料紙が比較的薄い鳥の子紙の場合は下敷の使用を視野に入れたほうが良いかもしれない。¹⁰ いずれにしても、行幅の偏りは、書写の際に用いたこのような道具の違いによって生じたものと考えられる。

さらに、宣慶本の本文にも興味深い傾向が認められた。『闕疑抄』（京都府立総合資料館蔵）が指摘する本文異同を中心に六〇箇所を選んで宣慶本の本文を対照した。その結果を示したのが次頁にあげた表である。これを見ると、DEFG間、HI間において、それぞれの本文の傾向が似ていることがわかる。このような特徴は親本の違いによって生じたと考えて良いのではないだろうか。

つまり、行幅と本文傾向を検討した結果、宣慶本には

〔甲〕 DEFG
〔乙〕 HI

という二つのグループの存在が想定されることになる。

これをふまえて奥書を再度確認すると、DEFGは花押を持ち、さらにDEFがほぼ同文である。一方、HIは花押を持たない点が共通し、そしてやはりほぼ同文の奥書を有している。これらの奥書の状況もまた、

二つのグループの存在を裏付けていよう。

以上のことから、書写の時期や詳細な経緯は不明なものの、宣慶が『伊勢物語』を集中的に書写した時期が少なくとも二回あったと推定する。

四 宣慶本の時代性

さて、さきに宣慶本の特徴として樹形絵入り本の存在をあげた。じつはこれらの樹形絵入り本はすべて「甲」グループに属している。つまり特定の時期に宣慶が書写した本が挿絵を有するのである。

現存する絵入り本二点（DF）はいずれも列帖装で、料紙を重ねて折った括り六折を綴じて一帖に仕上げている。その一方で、本文と絵の配列は違い、

① 本文の括りと絵の括りを綴じたもの。本文二折、絵二折、本文二折の順に綴じる。四八図。（D）

② 本文と絵が一つの括りのうちにあり、それら六折を綴じたもの。三九図。（F）

となっていて、挿絵数も異なる。また、画風も異なるようである。現在所在不明のJは①であったと推定される¹¹。

E	F	G	H	I
98-103	98-104(輸入本)	98-105	98-203	94-85
「右伊勢物語全部者成人之依懸望書写之 畢 三月中旬 源宣慶(花押)」	「右伊勢物語全部者成人之依懸望書 写畢 五月日 源宣慶(花押)」	「右伊勢物語全部者成人之依懸望 書写畢 永祿月日 從宇多天皇廿 八代孫 高岡修理權大夫 源宣慶 (花押)」	「右一冊者成人之依懸望書写之畢 卯月日 源宣慶」	「右一冊者成人之依懸望書写之畢 八月日 源宣慶」
列帖装1帖(4折)	列帖装(6折)	列帖装(4折)	列帖装(4折)	列帖装(4折)
16.3×16.8	16.6×18.3	16.1×17.6	17.6×14.4	18.3×15.4
10行	10行	10行	10行	10行
12.7	13.1	12.9	13.4	15.3
14.5	14.35	14.4	11.3	11.8
いけともえあはて	いけともえあはて	いけともえあはて	いけともえあはて	いけともえあはて
いといたう	いといたう	いといたう	いといたふ	いといたふ
やつはしといひける	やつはしといひける	やつはしといひける	八橋とはいひける	八橋とはいひける
すゝろなるめをみることもおもふに	すゝろなるめをみることも思ふに	すゝろなるめをみることも思ふに	すゝろなるめをみることもおもふに	すゝろなるめをみることも思ふに
いとおほきなる河あり	いとおほきなる河あり	いとおほきなる河あり	*いとおほきなる河有けり	*いとおほきなる河ありけり
あれはの松	あれはの松	あれはの松	あれはのまつ	あれはの松
心うつしく	心うつしく	心うつしく	心うつしく	心うつしく
こと人にもにす	こと人にもにす	こと人にもにす	こと人にもにす	こと人にもにす
さくらの盛に	さくらのさかりに	桜の盛に	さくらのさかりに	桜のさかりに
おとこも女も	おとこも女も	男も女も	男も女も	男も女も
すきにけらしな	すきにけらしな	すきにけらしな	すきにけらしな	すきにけらしな
* ナシ	こひつゝそふる	こひつゝそふる	恋つゝそふる	恋つゝそふる
ちきりたりけるに	ちきりたりけるに	ちきりたりけるに	ちきりたりけるに	ちきりたりけるに
しりにたちて	しりにたちて	しりにたちて	しりにたちて	しりにたちて
おもほえず袖にみなとの	おもほえず袖にみなとの	おもほえず袖にみなとの	おもほえず袖にみなとの	おもほえず袖にみなとの
さほくかな	さほくかな	さほくかな	さほくかな	さほくかな
こさりけるおとこ	こさりけるおとこ	こさりけるおとこ	かのこさりける男	かのこさりける男
よしや草葉よ	よしや草葉よ	よしや草葉よ	よしや草葉よ	よしや草葉よ
さ社いへまた	さ社いへまた	さこそいへまた	さこそいへまた	さこそいへまた
いとかしこくめくみつかう	いとかしこくめくみつかう	いとかしこくめくみつかう	いとかしこくめくみつかう	いとかしこくめくみつかう
家とし	いゑとし	家とし	* 家とうしに	家とうしに
たかうとひあかる	たかうとひあかる	たかうとひあかる	たかくとひあかる	たかくとひあかる
あさましくえたいめんせて	あさましくえたいめんせて	あさましくえたいめんせて	あさましくえたいめんせて	あさましくえたいめんせて
かさなりちまき	かさなりちまき	かさなりちまき	かさなりちまき	かさなりちまき
をこせたりける	をこせたりける	をこせたりける	をこせたりける	をこせたりける
夢路をたとる	夢路をたとる	夢路をたとる	夢路をたとる	夢路をたとる
ありければこのおとこ	ありければこのおとこ	ありければこのおとこ	ありければこの男	ありければこの男
われをはしらすや	われをはしらすや	われをはしらすや	我をはしらすや	我をはしらすや
まさりかほなき	まさりかほなき	まさりかほなき	まさりかほなき	まさりかほなき
おとこ女	男女	男女	男女	おとこ女
かくかたはにしつゝ	かくかたはにしつゝ	かくかたはにしつゝ	かくかたはにしつゝ	かくかたはにしつゝ
いとかなしきこと	いとかなしきこと	いとかなしきこと	いとかなしきこと	いとかなしきこと
此男は人の国より	此男は人の国より	此男は人の国より	この男は人の国より	この男は人の国より
女もはたいとあはしとも思へらす	女もはたいとあはしとも思へらす	女もはたいとあはしとも思へらす	* 女もはたいとあはしとも思へらす	* 女もはたいとあはしとも思へらす
女のねやもちかく有ければ	女のねやもちかく有ければ	女のねやもちかく有ければ	女のねやもちかく有ければ	女のねやもちかく有ければ
こよひ	こよひ	こよひ	こよひ	こよひ
かさなる山にあらねとも	かさなる山にあらねとも	かさなる山にあらねとも	かさなる山はへたてねと	かさなる山はへたてねと
春宮のみやすむ所	春宮のみやすむ所	春宮のみやすむ所	春宮のみやすむ所	春宮のみやすむ所
山科のせむしのみこ	山科のせむしのみこ	山しなのせむしのみこ	山しなのせむしのみこ	やましなのせむしのみこ
さるにかの犬得	さるにかの犬得	さるにかの犬得	さるにかの犬得	さるにかの犬得
たいしきのしたに	たいしきのしたに	たいしきのしたに	いたしきの下に	いたしきのしたに
となむよみけるは	となむよみけるは	となむよみけるは	となむよみけるは	となむよみけるは
おもひいで聞えけり	思ひいで聞えけり	思ひいで聞えけり	おもひ出てきえけり	おもひひてきこえけり
哥をよみてやれりけり	うたをよみてやれりけり	うたをよみてやれりけり	哥をよみてやれりける	うたをよみてやれりける
* 糸うのすけともあつまりきにけり	糸うのすけともあつまりきにけり	糸うのすけともあつまりきにけり	糸ふのすけともあつまりきにけり	糸ふのすけともあつまりきにけり
石のおもてに	石のおもてに	石のおもてに	石のおもて	石のおもて
あまのいさり火	あまのいさり火	あまのいさり火	あまのいさり火	あまのいさり火
わかすむかたのあまのたく火か	わかすむかたのあまのたく火か	わかすむかたのあまのたく火か	我すむかたのあまのたく火か	我すむかたのあまのたく火か
かくもにほふらめ	かくもにほふらめ	かくもにほふらめ	かくもにほふらめ	かくもにほふらめ
秋まつころをひに	秋まつ比をひに	脱文	秋たつころをひに	秋たつころをひに
此女のせうと	此女のせうと	此女のせうと	女のせうと	女のせうと
* ければこの女	されはこの女	されはこの女	* さりければこの女	* されければこの女
四十の賀	四十の賀	四十の賀	四十の賀	四十の賀
よきさけありときとてうへに有ける左中弁	よきさけありときとてうへに有ける左中弁	よきさけありときとてうへに有ける左中弁	よきさけありときとてうへに有ける左中弁	よきさけありときとてうへに有ける左中弁
* かくるゝ人あふみ	かくるゝ人あふみ	かくるゝ人あふみ	* かくるゝ人あふみ	* かくるゝ人あふみ
かのあるしなる人	かのあるしなる人	かのあるしなる人	かのあるしなる人	かのあるしなる人
いにしへは	いにしへは	いにしへは	* いにしへは	* いにしへは
ねむ比にいひちきりける	ねん比にいひちきりける	ねん比にいひちきりける	ねん比にいひちきりける	ねむ比にいひちきりける
おきのみてみやこしま	おきのみてみやこしま	おきのみてみやこしま	おきのみてみやこしま	おきのみてみやこしま
かゝる哥をよみけり	かゝる哥をよみけり	かゝる哥をよみけり	かゝる哥をよみけり	かゝる哥をよみけり

表 本文異同対照

		A	B	C	D
	所蔵整理番号	98-357	913.32-1	98-316	98-102(輸入本)
	書写奥書	「右一冊者平野氏勝安依御所望書写之 畢 寛文四年甲辰六月十日 源宣慶」	「源宣慶朝臣」	「七月日 源宣慶」	「右此伊勢物語全部者或人之依願望書 畢 三月上旬 源宣慶(花押)」
	装訂	列帖装(4折)	列帖装(3折)	列帖装(3折)	列帖装(6折)
	書型	16. 9×17. 4	16. 6×18. 0	22. 1×17. 0	15. 9×17. 4
	行数	10行	10行	10行	10行
	字高	13.1	14	19.7	13
	行幅	13.4	15	14.4	14.3
1	5段	いけともえあはて	×	×	いけともえあはて
2	5	いといたく	×	×	いといたく
3	9	やつはしとはいひける	×	×	やつはしといひける
4	9	ずしろなるめをみることもおもふに	×	×	ずしろなるめをみることもおもふに
5	9	いとおほきなる川あり	×	×	いとおほきなる河あり
6	14	あれはの松	×	×	あれはの松
7	16	心うつくしう	×	×	心うつくしく
8	16	ことに人にもにす	×	×	こと人にもにす
9	17	さくらのさかりに	×	×	桜の盛に
10	23	おとこも女も	×	×	おとこも女も
11	23	すぎにけらしな	×	×	すぎにけらしな
12	23	こひつそぬる	×	×	* ナシ
13	24	ちきりたりけるを	×	×	ちきりたりけるに
14	24	しりにたちて	×	×	しりにたちて
15	26	おもほえず袖にみなとの	×	×	おもほえず袖にみなとの
16	26	さほかな	×	×	さほかな
17	27	かのこさりけるおとこ	×	×	こさりけるおとこ
18	31	よしや草葉よ	×	×	よしや草葉よ
19	40	さこそいへまた	×	×	さこそいへまた
20	43	いとかしこくめくみつかう	×	×	いとかしこくめくみつかう
21	44	いゑとし	×	×	いゑとし
22	45	たかくとひあかる	×	×	たかうとひあかる
23	46	あさましくえたいめんせて	×	×	あさましくえたいめんせて
24	52	かさりちまき	かさりちまき	かさりちまき	かさなりちまき
25	52	をこそせたりける	をこそせたりける	をこそせたりける	をこそせたりける
26	54	夢路をたとる	夢路をたとる	夢路をたとる	夢路をたとる
27	58	有ければおとこ	ありければ男	有ければ男	有ければはとのおとこ
28	62	われをはしるやとて	我をはしらすや	われをはしらすや	われをはしらすや
29	62	まさりかほなみ	まさりかほなみ	まさりかほなみ	まさりかほなき
30	64	おとこ女	男女	おとこ	男女
31	65	かくかたはにしつゝ	かくかたはにしつゝ	かくかたはにしつゝ	かくかたはにしつゝ
32	65	いとかなしきこと	いとかなしきこと	いとかなしきこと	いとかなしきこと
33	65	このおとこは人の国より	この男は人の国より	この男は人の国より	此男は人の国より
34	69	女もはたあはしともおもへらず	女もはたあはしともおもへらず	女もはたあはしとも思へらず	女もはたいとあはしとも思へらず
35	69	女のねやもちかくありければ	女のねやもちかく有ければ	女のねやもちかくありければ	女のねやもちかく有ければ
36	69	こよひ	こよひ	こよひ	こよひ
37	74	かさなる山はへたてねと	かさなる山はへたてねと	かさなる山にあらねとも	かさなる山にあらねとも
38	76	春宮のみやすん所	春宮のみやすむ所	春宮のみやすむ所	春宮のみやすむ所
39	78	山しなのせむしのみこ	山しなのせむしのみこ	山しなのせむしのみこ	山科のせむしのみこ
40	78	さるにこの大將	さるにこの大將	さるにこの大將	さるにこの大將
41	81	いたしきのしたに	たあしきのしたに	たいしきのしたに	たいしきの下に
42	81	となむよみける	となむよみけるは	となむよみける	となむよみけるは
43	83	おもひ出てきこえけり	思ひいてきこえけり	おもひいてきこえけり	思ひいて聞えけり
44	86	哥をよみてやれりける	* 哥よみてやれりける	哥をよみてやれりけり	うたをよみてやれりけり
45	87	ゑうのすけともあつまりきにけり	* ゑふのすけともあつまりきにけり	ゑうのすけともあつまりきにけり	ゑうのすけともあつまりきにけり
46	87	いしのおもてに	石の面に	いしのおもてに	石のおもてに
47	87	あまのいさりする火	あまのいさりする火	あまのいさりする火	あまのいさり火
48	87	我すむかたのあまのたく火か	わかすむかたのあまのたく火か	我すむかたのあまのたく火か	わかすむかたのあまのたく火か
49	90	かくもにほふらめ	かくもにほふらめ	かくもにほふらめ	かくもにほふらめ
50	96	秋たつころをひに	秋たつ比をひに	あきまつころをひに	脱文
51	96	この女のせうと	脱文	女のせうと	脱文
52	96	されはこの女	* さりければこの女	されはこの女	脱文
53	97	四十の賀	四十の賀	四十の賀	四十の賀
54	101	よききけありとうへにありける左中井	よき酒有と聞て上ける左中井	よききけありときとうへにありける左中井	よききけありと聞てうへにありける左中井
55	101	* かくるゝ人あふみ	* かくるゝ人あふみ	* かくるゝ人あふみ	かくるゝ人おほみ
56	107	かのあるしなる人	かのあるしなる人	かのあるしなる人	かのあるしなる人
57	111	いにしへは	いにしへは	いにしへは	いにしへは
58	112	ねむころにいひきれる	ねん比にいひきれる	ねんころにいひきりける	ねん比にいひきりける
59	115	おきのみて宮こしま	おきののみやこしま	おきのみて宮こま	おきのみてみやこしま
60	123	かゝる哥をよみける	かゝる哥をよみける	かゝるうたをよみけり	かゝる哥をよみけり



図3 承応三年刊本（部分） 静嘉堂文庫蔵



図4 慶長一三年刊嵯峨本（部分） 国文学研究資料館蔵



図5 宣慶本D 国文学研究資料館蔵

さて、宣慶本の時代性を検討するにあたって、本稿では①をとりあげたい。それというのも、①の挿絵については、良く似た挿絵を持つ絵入り板本の存在が指摘できるのである。承応三年刊本とそれを踏まえた絵を持つ刊年不明本（万治二年五月印）である。

承応三年刊本は、承応三年（一六五四）三月下旬に京の書肆山田市郎兵衛が刊行した本である。四色の色替わり雁皮紙を使って趣向を凝らしており、書型は縦一五・七センチ、横一一・三センチと小さい。挿絵四八図を有する袋綴じ本で、絵と本文は別丁仕立てになっている。現在所

在が確認されているのは静嘉堂文庫蔵の一本のみである。¹³⁾

この本の挿絵は嵯峨本をふまえた構図と描写を持つが、細部に違いもみられる。そのひとつが、第九段「宇津の山」の挿絵に関する描写である。これは、東へ下る男が修行者と宇津の山で出会う場面だが、修行者が背負う笈を見ると、上部へうねった棒のようなものが伸びている【図3】。これは嵯峨本の同じ場面にはない描写である【図4】。一方、宣慶本Dを見てみると、棒が上へ向かって伸びており、しかも二本に増えているのが確認できる【図5】。

このような宣慶本Dと承応三年刊本の描写の類似点はほかにも認められる。また、挿絵の数が四八図である点も共通し、絵画化場面もすべて一致するなど、両者の関係は深いと言つて良い。ただし、宣慶本のほうが人物が少なく、主要な男女の姿すら削られるなど(第一二段「武蔵野」、描く際に簡略化したことが窺える。

ところで、宣慶本Dの挿絵には不安定な印象が避けられない。理由は単純で、絵の大きさと配置が不自然なのである。紙面の下方三分の一の部分にやや粗い筆致の淡彩の小さな絵が配され、残り三分の二ほどの余白に霞引きが施される。その紙面構成が安定感を欠いているのである。

ところが、じつはこの構成は意図的になされたものであった。それを示す資料が『伊勢物語絵冊子』(松井文庫蔵)である【図6】。この絵冊子は、四九面すべてに絵と場面を説明する文章と和歌(一・二首)が書かれ、いわば『伊勢物語』の絵入りダイジェスト版のようなものである。

図5と図6を比較すれば、この絵冊子と宣慶本が近い関係にあることは一目瞭然であろう。絵の数は『絵冊子』のほうが一図多い。書型は縦一四・六センチ、横一七・五センチ。宣慶本Dは縦一五・九センチ、横一七・四センチであり、『絵冊子』のほうが縦一・三センチほど小さい。

これら二点の資料からは、紙面下方に絵だけを配した括りが、ある時は写本の挿絵として、またべつの時は絵冊子として、適宜手を加えて使い分けられていたことがわかる。そして、このような括りがさらに複数作られていたことも、『伊勢物語画帖』(国文学研究資料館鉄心斎文庫・九八／三七八)に貼られた断簡から判明する【図7】。現在では断簡とし

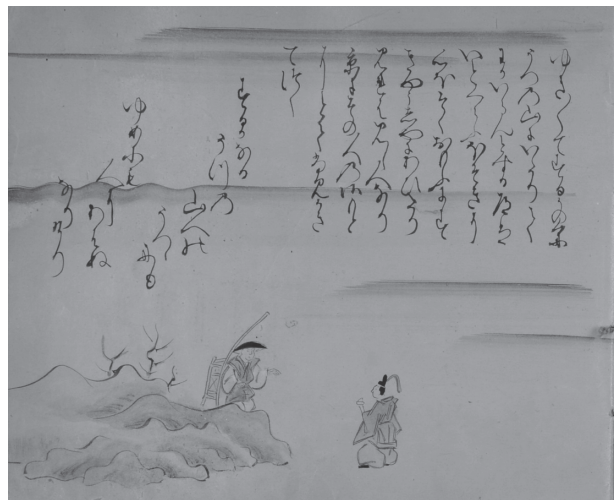


図6 伊勢物語絵冊子 松井文庫蔵
画像提供：八代市立博物館未来の森ミュージアム

て伝わるこの資料は当初絵冊子として調製された可能性が高い。

宣慶が生きた一七世紀中頃から一八世紀初め頃は、印刷技術の向上とともに、歌書の刊行が盛り上がりを見せることが指摘されている。¹⁴⁾『伊勢物語』もその例外ではない。関口一美氏「整版本伊勢物語」(『伊勢物語板本集成』所収)の指摘にもとづけば、近世前期から中期にかけて伊勢物語絵入り板本は、



図7 伊勢物語画帖 国文学研究資料館蔵

一六〇〇～一六五〇年代 一〇種（うち嵯峨本四種）
 一六五〇～一七〇〇年代 三〇種
 一七〇〇～一七五〇年代 一〇種

が新たに刊行されている。宣慶が生きた一七世紀後半は、まさに伊勢物語絵入り板本の全盛期と重なる。また、この頃は奈良絵本の制作も続いており、絵入りかるたも印行されるようになるなど、古典文学に関する視覚的享受が多様化した時代でもあった。

宣慶は依頼をうけて『伊勢物語』を書写するにあたり、桐形で列帖装という中世以来のスタイルに則った書写年を明記しない本を作った。これはそのまま文字だけの写本として表紙を付けるなどして、完成させることができた。そしてまた、造本の際に絵だけの括りを綴じ合わせることで、桐形絵入り本として仕上げることもできた。一方、絵だけの括りは、紙面上部に本文や和歌を書いて絵冊子に仕立てられることもあった。公家の手になる写本への需要と、絵入り本への需要、その二つが『伊勢物語』と結びついて宣慶本Dは作られたのである。そして、このように桐形の本文と綴じ合わせるためには、絵の括りもまた桐形で作る必要があった。

そのような宣慶本の成立に深く関わったと考えられる存在が絵草子屋である。母利司朗氏は元禄頃の人々の写本への関心について、「歌書などを中心として、名のある公家や能筆の手になる写本」への尊崇や所有欲の高さを指摘したうえで、その需要を満たす形で写本制作を受注し、絵屋・筆工・表紙屋などの関連業者への発注、点検、販売にいたる全過程を請け負った江戸の書本屋の営為について詳述している¹⁵⁾。さらに氏は書本屋が扱う二大ジャンルとして歌書と絵草子をあげるが、本稿で検討した宣慶本『伊勢物語』と『伊勢物語絵冊子』はまさにそれに該当する。

依頼による複数回の『伊勢物語』書写、板本挿絵との関係、絵冊子にも絵入り本挿絵にも利用できる絵括りの制作など、宣慶本をめぐる確認できるさまざまな特徴は、江戸時代前期の写本制作の多様な実態を示しているのである。

五 おわりに

宣慶本の多くは、証本としての奥書を持たず、書き入れもなく、美麗な料紙や装訂を持つ、いわゆる嫁入り本、棚飾り本と呼ばれるものである。このような本は相当数作られたと考えられるが、膨大なそれらの写本を整理分析し、文化史のなかにいかに位置づけるかは今後の課題である。

人が物語をどのように書写し、伝え、鑑賞し、解釈し、変化させるかは時代や帰属する社会によって異なる。それらの分析を重ねることで、伊勢物語が古典として今にいたった過程が明らかになってくるだろう。

本稿では、葛岡宣慶本の持つ特徴を分析し、江戸時代前期の公家による伊勢物語写本制作とその周辺について検討した。このようなささやかな指摘をつうじて、伊勢物語がたどってきた歴史を明らかにできればと考える。

〔注〕

(1) 松田敬之氏『次男坊たちの江戸時代―公家社会の「厄介者」―』(吉川弘文館、二〇〇八年)

(2) 宣慶が大坂へ移り住んだ時期を明示する資料は確認できていないが、市古夏生氏『ふもとの塵』の成立(『国語と国文学』五八一―一一、一九八一年一月)によると、宣慶は万治年間より民間で生活をしていったという。また、『和歌大辞典』(明治書院、一九八七年)

には後西天皇の即位にあたって宣慶が位記を返上した旨指摘がある(渡辺守邦氏執筆)。

(3) このほか、『八雲神詠口訣』の伝受本を有していたことを野上潤一氏が指摘している。(平成二九年度和歌文学会・仏教文学会・説話文学会合同特別例会「中世古今集注釈とテキスト・信仰・学問」口頭発表)

(4) 永井一彰氏『俳諧短冊手鑑』(八木書店、二〇一五年)に紹介されている。

(5) 滋岡長平氏「神主滋岡家歴代の人物像とその事績について」(『大阪天満宮史の研究』、思文閣出版、一九九二年)。

(6) 伊藤慎吾氏「雅人と絵巻制作―国立国会図書館蔵『平家物語絵巻』について」(『中世物語資料と近世社会』、三弥井書店、二〇一七年)は宣慶奥書を持つ平家物語絵巻について詳しく検討し、あわせて宣慶写の『三十六人歌合』(東京成徳学園十条台キャンパス図書館蔵)、『源氏物語(横笛)』(筑波書店古書目録、平成二四年一月号)の存在を指摘する。また、知念理氏「大宮神社(山鹿市)の土佐光起筆『三十六歌仙図扁額』―和歌筆者・葛岡宣慶に注目して―」(『美をつくし』一八九号、二〇一八年三月)は土佐光起が歌仙絵、宣慶が和歌を書いた扁額の存在を報告する。なお、宣慶筆『古今和歌集』『三十六歌仙』『三十六歌僊歌集』が早稲田大学古典籍総合データベース、『平家物語絵巻』が国立国会図書館デジタルコレクション、『伊勢物語』(四点)、『百人一首』が国文学研究資料館新日本古典籍データベースで公開されている(二〇一八年一月現在)。

(7) 『百人一首御講釈聞記』(大阪市立中央図書館蔵・享保一四年写)

に奥書「右之本五辻英仲奥書之通無紛候間 再重貞書之加畢 宝永五年子五月下旬 宣之」が転写されている。これより一〇年前の元禄一一年に宣慶の三男広仲が勅命によって五辻家を相続した。

(8) 林進氏「中尾本伊勢物語絵本」(『伊勢物語絵巻絵本大成 研究篇』、角川学芸出版、二〇〇七年)にも同様の指摘がある。

(9) 『奈良絵本上』(京都書院、一九九七年)

(10) HとIは行幅の値は近いが、字高が約二センチ異なる。この場合は下敷を使つたと考えるほうが穩当のようにも思われる。

(11) 『鉄心斎文庫所蔵伊勢物語図録三』(鉄心斎文庫伊勢物語文華館、一九九二年)掲載の書影と解説より推定した。

(12) 山田市郎兵衛は京都寺町二条通上ル町に居をかまえて明暦頃に御伽草子等を刊行していたことが市古夏生氏『元禄・正徳・板元別出版書総覧』(勉誠出版、二〇一四年)に指摘される。

(13) 書誌は『静嘉堂文庫の古典籍 第三回 日本の貴重書』(一九九八年)解題による。書影は『静嘉堂文庫所蔵 物語文学書集成』にマイクロフィルムが収められるほか、山本登朗氏編『伊勢物語版本集成』(竹林舎、二〇一一年)に全冊が掲載されており便利である。

なお、同板と推測される本を横山重氏が戦前に二点所有していたこと、「嵯峨本よりも、もつと珍本」という認識であったことが『書物捜索』上(角川書店、一九七八年)に記される。

(14) 上野洋三氏『元禄和歌史の基礎構築』(岩波書店、二〇〇三年)、神作

研一氏『近世和歌史の研究』(角川学芸出版、二〇一三年)などによる。

(15) 「書本屋について」(『東海近世』六号、一九九三年二月)。母利氏はまた、書本屋が筆工に発注する際には親本と料紙を届けたと推定している。宣慶本の本文を検討するうえでも興味深い指摘である。また、浜田啓介氏「草子屋仮説」(初出『江戸文学』八号、一九九二年三月、改稿『近世小説・営為と様式に関する私見』、京都大学学術出版会、一九九三年)は草子屋に既成の絵草子・商品の蓄積があつたと推定されており、本稿でとりあげた絵の括りの転用を考える上でも注目される。

〈付記〉

本稿は平成二八年一月一〇・一一日に東洋文庫で開催された国際シンポジウム「絵入り本と日本文化」および平成三〇年五月三十一日に国文学研究資料館で開催されたシンポジウム「魅惑の鉄心斎文庫―伊勢物語の〈文化史〉―」において行った口頭発表をもとにしています。貴重なご教示やご意見を賜った山本登朗氏、佐々木孝浩氏、浅野秀剛氏、横井孝氏、佐藤悟氏、神作研一氏、小高道子氏、川平敏文氏、齋藤真麻理氏、大口裕子氏、谷川ゆき氏、恋田知子氏に御礼申し上げます。

また、資料の掲載や調査をお許しくださった松井文庫、八代市立博物館、静嘉堂文庫、鶴見大学をはじめ、関係者の方々に感謝いたします。最後に、長年にわたり伊勢物語蒐集と保存に取り組んでこられた芦澤新二氏・美佐子氏に深い敬意と謝意を表します。